2015.4.14

博物館 Dictionary No.178

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F-2(仏画)に展示されている「法華経と釈迦の美術」について勉強してみよう。

法華経と釈迦の美術

仏教を始めたのは、インドの釈迦如来（現地の発音ではシャーキャムニ）です。『法華経』は、その釈迦によって説かれたとされますが、実際にはその没後の大乗仏教運動の中で整理されたものです。初期の部派仏教は自身の悟りを求める要素が強かったのですが、大乗仏教はそれを批判し、自分だけでなく、あらゆる人々の救済も積極的に推し進めようとしました。ですので、自身を「大きな乗り物（大乗）」と名乗り、それ以前の部派仏教を「小さな乗り物（小乗）」とけなしたのです。

『法華経』は万人に仏性が宿っており救われると説きますが、これは当時としては革新的に過ぎました。それはそうですよね、「こんな鬼畜なことをする人に仏の心が宿っているわけがない」と思いたいですし、人殺しとかの大罪を犯した人が善い人と同じように救われるとするのは非常に抵抗があります。ですので、仏教は様々な人を救うけれども、仏性がもとから備わっていない人や大罪を犯した人は救われない、とそれ以前は言っていたのです。ですから、『法華経』の中でも「信じられずにこの経の悪口を言う者もあろうが、これが真実だ」と繰り返し述べています。

こうして、『法華経』は、全人類救済を目指した大乗仏教の精髄というべき存在として扱われるようになりました。日本において、『法華経』は、平安時代の最澄（767 ～ 822）が始めた天台宗でことのほか大切にされ、以降、広く信仰を集めました。特に、鎌倉時代にかけて仏教が民衆に広まっていくなかで、万人救済を図ることが仏教者の課題となりました。社会問題が大きくなるほど、この意識は強くなり、これが鎌倉新仏教を生み出す精神的母胎ともなりました。天台宗で勉強した僧が鎌倉新仏教に多かったのは、『法華経』の精神を受け継いだからとも言えましょう。

そのため、『法華経』とそれを説いた釈迦にまつわる仏画は、日本に多数残されています。『法華経』は、革新的な内容もさりながら、二十八のチャプターに分けて（二十八品）、たとえ話をたくさん用いてわかりやすく仏教を説いたため、絵画にし易かったのです。ここでは紹介しませんが、法華七喩と言われる七つのたとえ話は特に有名です。

それでは、具体的な作品を見てみましょう。

これは平安時代末期の法華経曼荼羅図（海住山寺蔵）で、『法華経』からいくつかの場面を選んで一図にまとめたものです。この手のお経の内容を表した絵は、その内容を知らないと全く楽しくないのですが、当時の貴族でしたら『法華経』は一般常識だったでしょうし、わからない人には僧が説明したのでしょう。この絵の場合は、場面の選び方が他に比べて少し変わっており、異なる場面を全体として自然にまとめるための工夫がなされています。加えて、絵も繊細で高級品ですので、絵解きによって布教を目的としたとは言い難く、貴族に向けた知的かつ芸術的な作品だと言えましょう。

重要文化財 《法華経曼荼羅図》 京都府・海住山寺蔵

次に、普賢菩薩十羅刹女像〔須磨寺（福祥寺）蔵〕です。この絵は、『法華経』を信じる者を守護すると『法華経』に説く普賢菩薩と十羅刹女とを組み合わせて表現したものです。

重要文化財 《普賢菩薩十羅刹女像》 兵庫県・須磨寺（福祥寺）蔵

特に、十羅刹女は、女性の信仰と関わるとされます。実は、仏教ではかつて女性には仏性がないとされていたのですが、『法華経』はそれを否定し、女性も信じれば男性に生まれ変わって成仏すると説いたのです。そのため、『法華経』は女性の信仰を集めました。この十羅刹女は、異国の神なので異国の服装で表すのが本筋なのですが、この絵のように日本の十二単姿で表すのは、救いを求めた当時の女性の自己投影とも考えられています。

『法華経』は豊かな内容を持っているため、この短い文章では説明を尽くせません。興味を持った人は読んでみて下さい。仏画を見る楽しみも増えることでしょう。見て理解するのも、美術鑑賞の楽しみの一つなのです。

（美術室　大原嘉豊）

印刷・富士印刷社